

G. S. クレイグの初等科学教育論

—占領期日本の理科教育への影響—

柴 一 実

SHIBA Kazumi

広島大学学校教育学部

[キーワード] G. S. クレイグ, CIE, 科学の教室, 科学と子供の生活

緒 言

占領下において、わが国の小学校理科教育は、GHQのCIEの指導のもとに、文部省によって改革された。現在の理科教育の基礎を形成したこの改革において、アメリカがどのように拘わっていたのかという関与の実態とその意味を問うことは、理科教育史上重要なことである。この観点から筆者は、先に、小学校理科教科書『小学生の科学』の作成の際に、米国寄贈の教育課程文庫が与えた影響について明らかにした。この研究過程で、当時、コロンビア大学の教授で、アメリカの理科教育の革新に大きな影響力を持っていたクレイグ(Craig, Gerald Spellman:1893-?)の著作がわが国でいち早く翻訳され、『科学の教室』(1949)、『科学と子供の生活』(1949)という書名で出版され、大ベストセラーになったという事実を見出した。

本研究は、教育思潮の形成という側面から、わが国の初等理科教育革新の一端を担った上記の著作を取り上げて、翻訳出版の経緯と同書の基調をなす理科教育論を明らかにすることによって、戦前・戦中の科学教育観から戦後の民主主義的科学教育観への転換に果たした役割について考察したものである。

1. クレイグの経歴とアメリカにおける位置

クレイグは、1893年5月6日オハイオ州ドグラフに生まれた。1915年テキサス州ベイラー大学を卒業して、理学士の学位を得、1917年コロンビア大学で修士号、1927年同大学で博士号(Ph.D.)の学位を取得した。1915-18年にテキサス州ベリンガーハイスクールの物理教師、1917-18年、第一次世界大戦に出征、1921-23年コロンビア大学ティーチャーズカレッジ助手、その後助教授を経て、1941年同大学教授となった。

クレイグは、1920～30年代に初等理科教育をNature StudyからElementary Scienceへと拡充発展させることに貢献した人物であり、当時のアメリカにおいて高く評価されていた。

2. 『科学の教室』及び『科学と子供の生活』の翻訳出版の経緯

GHQが、占領目的の促進に役立つ新刊書の中から優れたものを選択し、日本語に翻訳し、日本人に読ませるシステムを発足させたのは、1948年5月のことであった。この外国図書翻訳計画に従って、CIEを通じて日本側出版社と翻訳契約が結ばれた外国図書は、翌年9月までに、385冊に上り、既にこの時期までに60冊が翻訳を終え、出版されていた。

“Science for the Elementary-School Teacher”(1940)は、この翻訳計画に基づき、第1回許可書として承認され、時事通信社より、『科学の教室 上・中・下巻』という名称で昭和24年秋までに出版された。この間の事情について、当時時事通信社で編集の任に当たっていた立花丈平氏はGHQの印刷・出版部門のインボデン(D.C.Imboden)が同通信社に同書を持ち込んだ、と語っている。

引き続き、1948年秋、CIEによる第2回許可書として、“Science in Childhood Education”(1944)が西本三十二氏翻訳で出版される運びとなった。

3. 翻訳書にみられるクレイグの科学教育論

クレイグは、健康で安全な生活を送るために必要な科学的知識に加えて、科学的態度や批判的精神の啓培が民主主義的市民の育成には必要であることを力説した。このような科学教育観に基づいて、科学カリキュラムの内容として、地球のかなたや地球、生活に必要な条件、生物、物理的・化学的な力、環境をコントロールする人間の試み、の6領域を提言した。

4. わが国の戦後理科教育の革新とクレイグ

クレイグの著作にみられる民主主義的理科教育理念は、わが国の戦後の理科教育革新の方向と一致するものであった。『科学の教室』がベストセラーになったことが物語るように、クレイグの著作は、戦後理科教育思潮の形成に大いに影響を与えたのである。